日　新聞　（夕刊）　新聞定価 朝夕刊月ぎめ 本体価格 3,738円(税込み 4,037円)、1部売り(税込み)朝刊 150円、夕刊 50円　第3種郵便物認可

熊本地震で奮闘 日系ペルー人介護スタッフ

「患者優先 みんなヒーロー」

熊本市の病院で介護スタッフとして働く日系ペルー人が、熊本地震での体験を日本語スピーチコンテストで話し、入賞した。余震が続くなかで家族をおいて職場に行くことへの葛藤、同僚たちとの触れあい、介護への思いを率直に語った。

日本語スピーチコン3位入賞

入院患者と談笑する吉里・ウガス・エミリオ・リカルドさん＝熊本市北区山室6丁目の熊本機能病院

熊本市北区の熊本機能病院で働く日系3世、吉里（よしざと）・ウガス・エミリオ・リカルドさん(43)。2001年に技術研修員として来日し、同病院でリハビリを学んだ。日本語教師のさち子さん(42)と出会い、ペルー帰国後に結婚。04年に夫婦で熊本に戻り、エミリオさんは介護職に。15年秋から同病院で働き始めた。

家族おいて職場へ

昨年4月14日夜。熊本市北区の自宅にいたとき、前震が起きた。すぐ病院から電話があり、「できれば来てほしい」と言われた。

「えっ、こんな時に家族をおいて病院に行ってほしいって、ありえない」と一瞬思いましたが、長男が「パパ、心配しないで。僕に任せて。患者さんの命はお父さんにかかってるんだから、行っていいよ」と言いました。びっくりしました。彼の言葉をとても誇らしく思う半面、自分が恥ずかしくなりました。

長男(13)は当時小学6年。エミリオさんは「ペルーでは仕事より家族が大事。『行かないで』と言われたら行かなかった」と振り返る。妻も「気をつけてね」と送り出してくれた。自転車で病院に向かい、不安がる患者に付きそった。15日夜に帰宅。「やっと収まった」と思った16日午前1時25分に本震が襲った。

「家の中は危ない」と車に妻と長男、長女(9)を乗せて病院へ。家族は駐車場で車中泊させ、職場の病棟に入った。病棟のダメージは大きく、入院患者約120人を本館ロビーに移す最中だった。マットに寝かせたまま、あるいは車いすに乗せたままの患者を4～6人がかりで抱え、500メートルもある長い廊下や階段をひたすら往復した。

何回上ったか、何回おりたか、何人持ち上げたか。全く記憶がありません。（略）揺れが来ると、みんなの携帯からフオ、フオ、と緊急地震速報が鳴り響きました。みんなその場にしゃがんで、揺れが収まったら続けるというのを何度も繰り返しました。

同僚は泊まり込み

最後の患者を運び終えると、朝だった。本館には地域の人が何百人も避難していた。スタッフはその人たちにも毛布や食べ物を配った。それから数日間、自宅が近いエミリオさんは時折帰宅できたが、病院に泊まり込む同僚も多かった。

彼に「家のこととか心配じゃない？」と聞きました。「もちろん心配だけど、電話で話したし、こういうときこそ看護師としてやらないといけないことがあると思う」と話してくれました。私は本当に驚いて、心の底から感動しました。

こうした経験を今年の9月2日に東京であった「第6回看護・介護にかかわる外国人のための日本語スピーチコンテスト」（海外産業人材育成協会主催）で披露。1次予選を通過した10人中、3位に入賞した。

地震後、エミリオさんは介護の仕事がより好きになった。心配そうな患者さんを笑顔にすることができたからだ。今、めざすのは介護福祉士。日本語の壁で一度は断念したが、再挑戦するための勉強を始めた。

患者さんのことを最優先で考え行動する日本のスタッフに感銘を受けたというエミリオさん。「ヒーローはマントを着て空を飛んでスーパーパワーを使うのではなく、一人ひとりの中にいるんだと気づいた。私も大きくなりたい」

（渡辺純子）